

2024 年度出川真也ゼミ合宿

伊豆下田における社会教育・生涯学習施設を中心とした地域創生研究合宿
実施報告書



伊豆下田・爪木崎にて

大正大学地域創生学部地域創生学科
出川真也研究室ゼミナール

はじめに

(1) 概要・目的

今年度の出川真也研究室における夏季休業期間中の合宿では、静岡県下田市およびその周辺地域をフィールドとして、社会教育施設の訪問やまち歩き研修を実施した。

本合宿の具体的な目的は、以下の二点である。

- ①各分野での実践事例を検討するとともに、地域学習・実践視点に基づく地域づくりを想定したトレーニングを積み重ねながらマネジメント能力を養成すること。
- ②事業推進を展開するために地域外賛同者・共感者を広げ、参画者を募るのに効果的な情報発信方策について、理論と手法の両面から検討すること。

上記のほか、参加学生自身が合宿のプログラムを立案・設定したり下田市内の社会教育施設を訪問し、研修を行なったりすることによって、地域づくりに関する実践事例を学び、各自の視点から考察できる能力を高めることを目指した。このため合宿プログラムは、参加学生それぞれが持つ研究課題や興味のあるテーマに沿った訪問場所や研修内容を設定しており、今後の研究活動の資料を増やすことを見込んで構成されている。

今年度の参加学生の研究テーマは環境教育や子どもの学習活動、商店街のまちづくりが中心となっているため、下田市やその周辺で可能な限り多くの分野の研修が実施できるように努めた。

(2) 合宿の行程

【9月3日(火)】

- 12:30 集合(伊豆稲取駅)
- 13:00 社会教育施設の見学(伊豆アニマルキングダム)
- 17:00 移動・宿泊先(貸別荘 飯田)チェックイン
- 20:00 振り返りワークショップ

【9月4日(水)】

- 06:00 起床、早朝まち歩き
- 09:00 ジオパーク見学(恵比須島、爪木崎海岸)
- 13:00 社会教育施設の見学(下田海中水族館)
- 17:00 まち歩き研修①(ペリーロード)
- 20:00 振り返りワークショップ

【9月5日(木)】

- 06:00 起床、早朝まち歩き
- 09:00 まち歩き研修②(商店街見学、黒船クルーズ体験)
- 15:00 現地解散

(3) 合宿実施場所(静岡県下田市)について¹

今年度の合宿の実施場所である静岡県下田市は伊豆半島の南東部に位置し、山々に囲まれ、太平洋を間近に望む自然豊かな都市である。山海の美しい景観や、かんきつ類や金目鯛、海藻といった豊富な農・海産物は下田市の重要な観光地および経済的資源であるとともに、市民の生活を支える基盤としても確立されている。

さらに下田市は、幕末期にアメリカの東インド艦隊司令長官兼米使提督のマシュー・ペリーが日本に開国を要求した際に来航した港としても知られている。その為、下田市内にはペリー艦隊の来航記念碑が置かれたり、黒船の来航と開国を記念した「黒船祭」という祭典が開かれていたりしており、下田市のシンボルの一つであることが見て取れる。

このように、下田市は豊富な産業資源と深い歴史を持ち合わせる都市であり、それらを観光やまちづくりに有効活用している地域であるということは、実際に現地を訪問した際にも大いに実感することができた。社会教育施設に該当する建造物や下田市の地域づくりの様相が伺える場所も数多くあったため、合宿の実施場所という視点から見ても非常に学びの多い都市であったと言えるであろう。



写真1 黒船クルーズ体験
(伊豆下田港内にて)

(4) 実施体制、参加学生・教員

ゼミナール登録学生3・4年生7名の内、当日病欠者を除く、3名が参加。担当教員と研究室事務補佐・NPO 法人職員を加えた5名での実施となった。参加者は以下の通り。

【参加者】

出川真也（大正大学 地域創生学部地域創生学科 専任講師）

北野 凜（大正大学 地域創生学部地域創生学科 3年）

南澤勇樹（大正大学 地域創生学部地域創生学科 3年）

森 都波（大正大学 地域創生学部地域創生学科 3年）

熊谷あかね（現地サポート/特定非営利活動法人 里の自然文化共有研究所職員）

（はじめに執筆：熊谷あかね）

¹ 静岡県下田市については下田市ホームページ内「市の概要」(<https://www.city.shimoda.shizuoka.jp/category/070200shinogaiyou/index.html>) および「観光・産業」(https://www.city.shimoda.shizuoka.jp/category/kankou_sangyou/index.html)を参照。

1. 動物展示・体験施設と歴史探訪ー伊豆アニマルキングダムとペリーロード見学からー 南澤 勇樹

(1) 伊豆アニマルキングダム

合宿の初日は、下田市の自然を教育する施設として伊豆アニマルキングダムを見て回る事で、陸生動物生態という分野の社会教育が下田市においてどのように実施されているかを視察した。

伊豆アニマルキングダムは静岡県下田市で唯一の動物園であり、複数種の動物達が動き回る広大な空間を見て回るウォーキングサファリを始めとして、動物と触れ合う様々な体験が可能な環境教育施設である。我々が入園した日は雨模様であったが、家族連れや若者の来場客を数組確認することができ、観光や住民の娯楽施設として機能している事が推察された。

加えて、動物の傍まで近づけるエリアが複数存在し、餌やり体験ができる動物も豊富に存在した。特にホワイトタイガーへの餌やりは、見ることも珍しい動物がどのような肉球をしているかという情報までを観察できるため、私達も参加することにした。その時に担当してくださったスタッフの方には、アニマルキングダムで生活している2匹のホワイトタイガーが兄妹である事などを教えていただいた。

このような動物の紹介は、他のエリアでもスタッフの方から受けることができ、キリンの恋愛事情について解説していただくこともあった。以上の体験活動から、下田市の伊豆アニマルキングダムは動物の生態や珍しい動物の見た目だけでなく、動物同士の関係性という人間らしい事柄から動物への興味を引き付けるような取り組みもみられ、体験が豊富な動物園には動物に興味がある人やこれから興味を持つ人々にとって重要な社会教育施設だと言える機能があった。



写真2 伊豆アニマルキングダム入口



写真3 飼育スタッフにキリンの説明を受ける様子

(2) ペリーロード

伊豆急下田駅から徒歩15分の場所に位置する了仙寺は日米和親条約付録下田条約が締結された場所であるが、そこへ向けてペリー提督一行が行進した道は「ペリーロード」という名称を付けられており、第7回静岡県都市景観賞優秀賞を受賞している。今回はこのペリー

ロードを実際に散策する事で、一般的な道が人の集まる観光スポットになっている理由は何かという点を考察した。ペリーロードを進み、景観を望めばその付近の建物には伊豆石やなまこ壁が用いられている様子から、この道が京都の市街地や新潟の古町のような街並みを守る役割を持っている事が理解できた。また、レトロな街並みに適合した飲食店が並んでいた事から伺えるように、観光目的で訪れる人々から利潤を獲得する戦略も取られていると考えられる。

以上のことから、ペリーロードは古風な街並みをセールスポイントとし、下田市に利潤を呼び込む観光スポットとしての振興が進められている現状が分かった。加えて、歴史を伝えるために設置された石碑や立て看板がある事から、歴史の学習を助ける史跡として下田市の歴史を象徴する場所として機能していると判断でき、今後も伝統的な景観を保全するために重要な道だと理解される。



写真4 ペリーロードに立ち並ぶガス灯



写真5 街中に展示される大砲

2. 環境教育の視点からのジオパーク見学

森 都波

(1) 爪木崎

ゼミ合宿二日目は、まず爪木崎の景観調査を行った。爪木崎は伊豆半島ジオパークで紹介されているジオサイトである。爪木崎には俵磯（柱状節理）と呼ばれる静岡県指定天然記念物がある。

下田市観光協会が発行したパンフレットによると、伊豆半島は火山弧同士の衝突が現在進行形で起こる世界唯一の場所であり、約 2000 万年の間繰り返された活発な火山活動を地殻変動により形成されている地域である。

また、現地に設置されている看板からは、爪木崎から見える神子元島の灯台は日本最古の洋式石造り灯台であるということを知ることができた。さらに、国の史跡に指定されているという歴史ある灯台であることを知った。私は地元住民のため、柱状節理は学校の授業で見学したり、神子元島灯台の光も見ていたりしたが、県の指定天然記念物や、国で指定された史跡であることは知らなかった。観光協会のパンフレットや看板を読む機会もなかったのも、そこから学ぶことも多く、地域を知る資料としてとても重要だと感じた。



写真 6 爪木崎海岸



写真 7 神子元灯台の案内板

(2) 恵比須島

爪木崎の次に、恵比須島の景観調査を行った。恵比須島も爪木崎と同じく伊豆半島ジオパークで紹介されているジオサイトである。恵比須島の見どころは、軽石や火山灰が作る縞模様や水底土石流などの海底火山の名残である。島を一周してみると、地殻変動によって傾いているため同じ模様というものがなく、飽きない風景で、とても大きく、一面美しい地層の景色は太古からの壮大な歴史や、自然のエネルギーを感じた。さらに、島の周りにみられる千畳敷と呼ばれる地形は現在も地殻変動が続く証拠である。また、恵比須島の頂上付近には古墳時代～奈良時代の祭祀跡が見られ、古代人が海神や伊豆諸島の神々に祈りをささげた場所だと考えられている。



写真 8 恵比須島

夷子島遺跡に看板があることを初めて知り、恵比須島にこのような今の暮らしに繋がる歴史があったことを初めて知った。これらのことから、今の地域住民の信仰心の深さや、海との関係性、暮らしなどの歴史や、繋がりへの理解を深めることができた。



写真 9・10 恵比須島の信仰と夷子島遺跡の案内板

3. 海洋資源を活かした学習と観光活動ー水族博物館施設と観光船体験からー

北野 凜

(1) 下田海中水族館

ゼミ合宿二日目に、下田市の社会教育施設である下田海中水族館を訪れた。

様々な種類の生き物のコーナーを順番に回りながら観察したが、普段であれば通り過ぎてしまうような生き物の生態や秘密、歴史について詳細に書かれている展示パネルをじっくり読むことができた。また、生物について知識を得たうえで再度観察することで、最初の観察時とは違った視点から生物を見ることができ、より身近に感じることが出来た。また、アシカやイルカ、アザラシのショーを見学したが、ただパフォーマンスとして観るだけでなく、その動物が持つ身体能力や認知能力を短い時間で楽しみながら学ぶことができたのが印象的であった。

楽しみながら学ぶことができるのが水族館の最大の特徴だと思うため、社会教育や環境教育の場に非常に適していると感じた。体験的な学びが印象強く残ると言われている中で、普段出会うことのできない生物の生きる姿を間近で観たり触れたりすることのできる水族館は、一人ひとりの環境意識を高める上で重要な施設と言えると考える。



写真 11 アザラシのショーの様子

(2) 黒船クルーズ体験

最終日は、幕末開港歴史の港である下田港を遊覧船であり、黒船を模したクルーズ船「サスケハナ」に乗って一周するクルーズ体験を行った。船に乗りながら海岸沿いの街並みやペリー艦隊投錨の地、吉田松陰が密航を企てるために身を潜めたとされる弁天島、南伊豆の遠景などを観ることができた。



写真 12 遊覧船「サスケハナ」

下田市は歴史的文化が盛んであることでも有名であるが、実際にゆかりのある船に乗りながら眺めたりアナウンスを聞いたりすることで、その文化や歴史的背景を体験的かつ近い距離で学ぶことができるため、社会教育という点で非常に有効な体験活動であると感じた。また、船に近づいてくるカモメへの餌付けも体験した。人懐っこいのか、餌となるお菓子を手に持っているだけでカモメの大群が近寄ってきて、恐怖と驚きの感情ではあったが、餌を投げるたびにカモメたちとコミュニケーションをとっているような感覚になれて非常に有意義な時間になった。このように観光や歴史文化の学習という観点だけでなく、自然動物との触れ合いの機会にもなっているので、環境教育の一環にもなるのではないかと思った。



写真 13 カモメの餌やりの様子

おわりに

今年度ゼミナール合宿の伊豆の旅は、私にとっても思い出深いものとなった。期間中は、初日を除いては、ほぼ晴天となり、いっぽうで心配していた程の猛暑ともならず、普段はあまり見ることがないような名所旧跡も存分に見学することができた。宿泊についても、地元出身の森都波さんに手配いただいた貸別荘において、バーベキューや花火やらを楽しみながら、ゆっくりと快適に過ごさせていただいた。別荘のオーナーや森さんからの話から、この地に根ざした森一族の須崎地域におけるコミュニティの結束の一端に触れて、改めて地域創生の大事な側面を考えさせられたことも印象に残った。

今年度の合宿では、研究室が掲げる社会教育・生涯学習と地域づくり研究という共通テーマを踏まえながら、学生達は、各自の研究関心に基づいて、環境教育、子どものふるさと学習、商店街とまちづくりといった視点からプログラムを構想し、早い段階から準備を進めてきた。参加学生らの報告にあるように、実物や現場を見て体験することを通じて、それぞれの課題意識や視点から探究することに取り組んだ。現場と研究室を往還しながら地域づくりに対しての見識を深め、住民と寄り添う姿勢を培い、共に実践に活かしていける能力を育てていくことは、当研究室が目指していることの一つである。このような研究室の理念を念頭に入れつつも、楽しみながら主体的に前向きに合宿に取り組んだ学生らの今後の研究活動に期待を寄せていきたい。



写真 14 下田海中水族館でゼミ学生らや研究事務補佐員と共に記念写真

私自身のことを言えば、今夏は、東北地方でのフィールドワークや新潟での社会人向け講習の実施、新規事業に向けた研究体制づくりの下準備や付随する不具合の調整対応など、かなり多忙な毎日を送ってきた。こうした中、やや疲れ気味であった私にとって、今回の合宿は、心身共にまさに癒しを与えてくれたものといえよう。準備活動に携わってくれた学生諸君に感謝である。また、同行いただいた熊谷あかねさんにも、何かと行き届かない担当教員の私に代わって、学生らへの様々なお気遣いや丁寧な支援をいただいた、感謝申し上げたい。

合宿が終わると年度も後半に突入する。合宿で養った英気をもって実り豊かな成果を共に創っていきたい。

2024 年初秋 大正大学研究室にて
担当教員 出川 真也